

21	あとがき	90
20	インダス文明について学べる本	88
19	インダス文明のその後	84
18	インダス文明社会の変遷	80
17	インダス文明社会の衰退	76
16	インダス文明と周辺地域の交流(1)	72
15	インダス文明と周辺地域の交流(2)	68
14	インダス文明社会の宗教	64
13	社会を支えたもの(1)——墓と工芸品生産	60
12	社会を支えたもの(2)——物流と権力組織	56
11	インダス文明の工芸品	52
10	インダス文明のアイデンティティ(1)——印章	48
09	インダス文明のアイデンティティ(2)——文字	44
08	インダス文明のアイデンティティ(3)——土偶	40
07	インダス文明の食文化	36
06	インダス文明の食料生産	32
05	都市の生活空間	28
04	インダス文明の都市	24
03	インダス文明の成り立ち	20
02	インダス文明研究の歴史	16
01	インダス文明の編年	12
	インダス文明の範囲	8
	インダス文明が栄えた地域	4

シリーズ「古代文明を学ぶ」
インダス文明ガイドブック

●
上杉彰紀 著

監修
西秋良宏
編集委員
安倍雅史
松本雄一
庄田慎矢
下釜和也

01 インダス文明が栄えた地域

インダス文明が栄えたのは、紀元前2600〜前1900年頃の南アジア北西部の地域です。現代の国でいえば、パキスタンとインド北西部の地域に相当します。一部にはアフガニスタンにある遺跡も含まれており、東西、南北ともに1800キロの範囲に及んでいます。

地形で見ると、インダス川とその支流が形成した広大な沖積平野ちゅうせきへいぎを中心に、その周辺の平原部、高原地帯を含んでいます。降水量が著しく限られる地域もあれば、夏の季節風（7〜9月）が500ミリ以上の雨をもたらす地域もあります。アラビア海に面した海岸地帯を含んでいることも、インダス文明の特質を考えるうえで大切です。

こうした自然環境の多様性は、インダス文明の成立と展開のうえで重要な意味を有しています。一つは食料生産の多様性です。インダス文明を代表するモヘンジョダロ遺跡が位置するシンド地方やハラッパー遺跡があるパンジャブ地方では、コムギ、オオムギを中心とする冬作物の栽培が卓越していますが、北東部のガッガル地方では冬作物とイネや雑穀を含む夏作物が栽培されていたことがわかっています。逆に南東部のグジャラート地方では、夏季の季節風による降水しかないことから、雑穀を中心とする夏作物が人々の生活を支えていたと考えられています。また降水量が限られる高原地帯では、局地的な農業生産に加えて牧畜という生活基盤が発達したと考えられます。そ

れは平原部における定住農耕社会と高原部における牧畜社会の多様な関係がインダス文明の歴史において重要であることを示しています。

二つめは資源の偏在性です。平原部には降水量だけでなく、北のヒマラヤ山脈に発するインダス川とその支流が運んでくる豊かな水資源があり、潜在的に農業生産力が卓越していますが、それ以外の資源に乏しいという特徴があります。ガッガル地方は同じく平原部ですが、インダス平原とは異なる水環境[†]で、水資源の利用や土地利用、農法も異なっていたと考えられています。また、農業生産力以外の資源は限られています。一方、インダス平原やガッガル平原の周辺部に広がる北方山岳地域やパロチスターン地方、グジャラート地方の高原地帯は農業生産力は劣りますが、さまざまな石材や金属鉱石に恵まれているという特徴があります。

こうした各地で利用可能な資源が異なるという現象は、それぞれの地域に多様な生活スタイルや文化伝統を育んだ一方で、多様な特徴をもつ広大な地域をインダス文明という一つの都市社会にまとめあげるうえで重要な意味をもっています。

次章以下でみていくように、異なる自然環境のなかでかたちづくられた各地の地域社会と文化伝統が、偏在する資源を介してつながり、文明社会あるいは都市社会という広域型社会を生み出す基礎となったのです。また、広域型の都市社会のなかに取り込まれることになった各地の地域社会の関係がインダス文明の展開にも重要な意味を有しています。

このインダス文明社会がもつ自然環境と文化伝統における多様性と統一性は、この社会の特質を理解するうえで大きな手がかりとなるのです。異なる自然環境に根ざした多様な地域社会・文化群のあいだの関係がインダス文明社会をかたちづくっているということができます。

[†]インダス平原では、ヒマラヤ山脈の雪解け水を含めて豊富な水量がインダス川とその支流によって運ばれてくるが、ガッガル平原を流れるガッガル川とその支流は水量が限られており、インダス平原のような広大な氾濫原は形成されないという特徴がある。

01 インダス文明が栄えた地域

インダス文明は西の乾燥地域と東の湿潤地域のちょうど境目にあたる場所に栄えた文明である。この自然環境の移行帯には多様な環境が内包されており、文化的にも多様性に富んでいる。東西の地域との関係のなかでダイナミックな歴史が育まれた。

ユーラシア大陸の古代文明

衛星画像をみると、西アジアから南アジアにかけて黄土色の乾燥地域から緑に覆われた湿潤地域へと、気候が変化していくことがわかる。インダス文明はその成立と展開の過程で、西の文明世界と深い関わりをもっていたが、その終末期以降は東方との関係を強めていった。



現代のインダス地域の景観

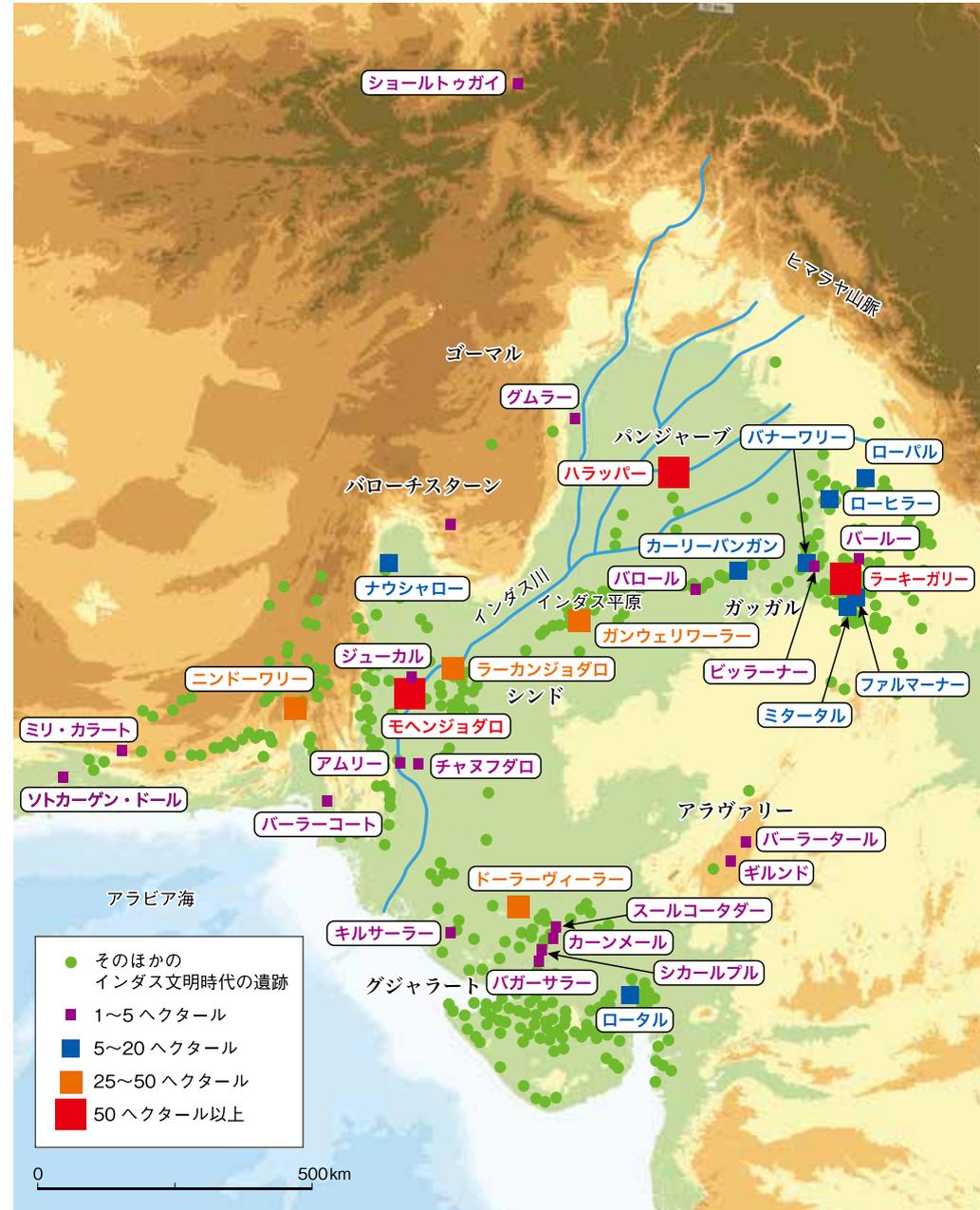


インダス文明の栄えた地域を西から東に移動すると、イラン高原の乾燥地帯からインド東半部の湿潤地帯への移行がみとれる。こうした自然環境の多様性は、インダス文明の性質を考えるうえで重要な意味をもつ。

- ①イラン高原東部
- ②インダス川
- ③乾燥地域に暮らす遊牧民
- ④豊かな水を用いて田植えをする人々

インダス文明の遺跡

インダス文明の遺跡は広大な沖積平野を中心に、その周辺の高原地帯を含んだ地域に展開している。インダス文明は、多様な地域社会と文化伝統を結びつけた広域型都市社会であった。



02 インダス文明の範囲

インダス文明が栄えた時代（紀元前2600〜前1900年頃）は、エジプトやメソポタミアに古代文明が発達した時期に相当しています。エジプトでは王のための巨大なピラミッドが次々とつくられ、メソポタミアでは神殿や王宮を擁する都市が生み出されました。また、本格的な文字が発達したのもこの時代のエジプトやメソポタミアです。

これらの古代文明の特徴は、広大な地域が一つの社会のなかに取り込まれ、大規模な労働力や資源を動員することを可能にする社会の仕組みが生み出されたことや、遠く離れた地域に暮らす人々とのコミュニケーションを可能にし、社会的規範や価値観を広く共有する社会が誕生したことを物語っています。

古代文明の社会は周辺地域との交流関係を発達させ、広域を結びつけるネットワークをつくりあげました。メソポタミア文明を例にあげると、アナトリアやイランの高原地帯、ペルシア湾岸地域からアラビア半島、さらには中央アジア南部を交流ネットワークのなかに取り込み、文明社会を維持するための諸々の資源を得ていました。このメソポタミアを一つの核とする交流ネットワークを「西南アジア文明世界」[†]と呼ぶならば、インダス文明はその東端に花開いた文明ということができま

[†]メソポタミアにおける都市社会の成立は、周辺にさまざまな影響を及ぼしたと考えられる。メソポタミアにはない資源が周辺地域との交易によってもたらされるとともに、人の移動も活発化し、周辺地域に交易の拠点が形成され、都市社会が形成されていく。そうした都市を拠点とした交流・交易の連鎖が「西南アジア文明世界」を生み出したと考えられる。インダス文明もそうした超広域ネットワークのなかでの人とモノの移動の活発化を基盤として成立した可能性が高い。

メソポタミアとつながることは、各地の社会にも大きな影響を与えました。逆に各地の社会や文化の動向がメソポタミアにも影響を与えています。インダス地域[†]もまたこの西南アジア文明世界に接続することで、文明社会の仕組みを生み出し、またメソポタミアやその周辺地域にも大きな影響を及ぼしています。インダス文明の成立と展開を西南アジア文明世界という広域的視点から捉えることは、この文明の特質を理解するうえで重要な手がかりとなります。

その一方で、インダス文明がメソポタミア文明とは異なる特徴をもつことは、単にインダス文明がメソポタミア文明あるいは西南アジア文明世界とのつながりだけで存在したわけではないことを示しています。西南アジア文明世界と関わりをもちながらも、インダスの地域内部での社会や文化の発展や動きがあったからこそ、インダス文明という独特の文明世界が生み出されたのです。

私は、インダス文明について、インダス文明域内各地の多様な自然環境に根ざした地域固有の社会や文化の単位（狭域）、インダス文明という一つのまとまり（広域）、西南アジア文明世界のなかでのインダス文明（超広域）という、少なくとも三つの空間スケールで考えるようにしています。異なる空間スケールでの事象が相互に関係しあってインダス文明という一つの歴史事象が生み出されたのです。こうした多層的な交流ネットワークはインダス文明社会の成立だけでなく、その展開と衰退においても重要な意味をもっています。広狭さまざまな地域間のつながりが、極めてダイナミックに変化する文明社会をかたちづくっていると考えることができます。インダス文明理解における交流関係の重要性については、これまでもさまざまなかたちで議論されてきましたが、異なる空間スケールでの交流関係が時間軸上でどのように変化したのかよくわかっていないのが現状です。

[†]インダス文明は、インダス平原だけでなく、その周辺の平野・高原地帯に広く展開した。本書では、インダス文明が展開した地域を「インダス地域」と総称する。

02 インダス文明の特徴と代表的な遺跡

世界四大文明の一つに数えられるインダス文明は、ユーラシア大陸の南西部に広がる「西南アジア文明世界」の一角に栄えた都市文明であった。人、物、情報が広く往きかった西南アジア文明世界のなかで、インダス文明はその東端に都市社会を発達させるとともに、交易品の輸出など、重要な役割を担った。

ユーラシア大陸の古代文明の比較

世界各地の古代文明と同様に、インダス文明は都市と文字の存在を最大の特徴としている。その一方で、ほかの古代文明とは異なり、壮大な王墓や神殿は確認されておらず、強力な権力の発達を見出すことは難しい。

	エジプト	メソポタミア	インダス	中国
前1000年				
	新王国時代	カシュト王朝期	鉄器時代	初期王朝時代 (二里头、二里岡、殷墟、三星堆など)
	第2中間期	古バビロニア王朝期	ポスト文明時代	
	中王国時代	イシナールサ期	インダス文明時代	新石器時代後期 (仰韶、龍山、良渚、屈家嶺、石家河など)
前2000年	第1中間期	ウル第3王朝期		
	古王国時代	アッカド王朝期	先文明時代	新石器時代中期 (仰韶、大汶口、河姆渡、崧澤など)
	初期王朝時代	初期王朝期		
前3000年		ジュムデット・ナスル文化期	先文明時代	新石器時代中期 (仰韶、大汶口、河姆渡、崧澤など)
	先王朝時代	ウルク文化期		
前4000年		ウバイド文化期	新石器時代	



①エジプト、ギザの王墓群



②メソポタミア、ウルの都市と神殿



③中国、殷墟の車馬坑

TOPIC インダス文明の発見

1921年、ハラッパー遺跡とモヘンジョダロ遺跡の調査により、インダス文明は発見された。その後の研究で、インダス文明誕生の契機や文明の展開などが明らかとなった一方で、どのような人々が文明を生み出し、どのような社会組織によって文明は支えられていたのか、なぜインダス文明は滅びたのかなど、研究の課題は多い。



④モヘンジョダロ遺跡の居住域の様子

インダス文明の代表的な都市遺跡

シンド地方の中核的な都市であり、インダス文明を代表する都市遺跡であるモヘンジョダロをはじめ、インダス地域内各地には多くの都市が築かれた。



⑤モヘンジョダロ遺跡（シンド地方）



⑥ハラッパー遺跡（パンジャブ地方）



⑦ドーラーヴィーラー遺跡（グジャラート地方）



⑧ラーキーガリー遺跡（ガッガル地方）

インダス文明の代表的な遺物

インダス文明は広い地域に展開した。ここにあげた遺物は広い範囲で出土しているもので、インダス文明社会の広域的統合性がうかがえる。



⑨印章



⑩ビーズ



⑪チャート製鎌刃



⑫おもり



⑬銅製品

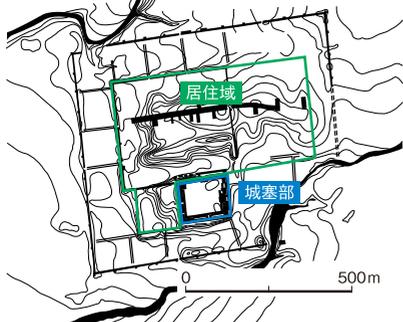
06 インダス文明の都市

地域社会の人的・物的さまざまな資源を大量投入して築かれたインダス文明の都市は、地域統合の中心であり、シンボルであったといえる。都市には、都市社会を運営・維持するための行政区（「城塞部」）と都市民の「居住域」が設けられていた。

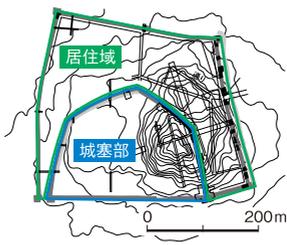
インダス文明の都市の構造

インダス地域各地の都市には、大きさだけでなく、かたち、構造にも違いがある。そうした違いは、都市を擁する各地の地域社会のあり方や各都市の建設目的・経緯の違いを反映するものであろう。
※城塞部・居住域の範囲は推定

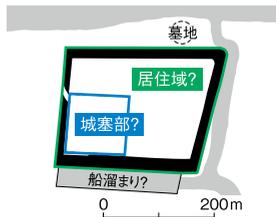
一体型



①ドラーヴィーラー（グジャラート地方）

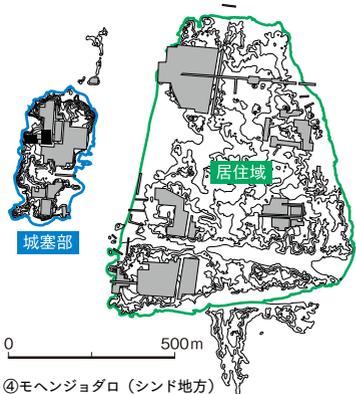


②バナーワリー（ガッガル地方）

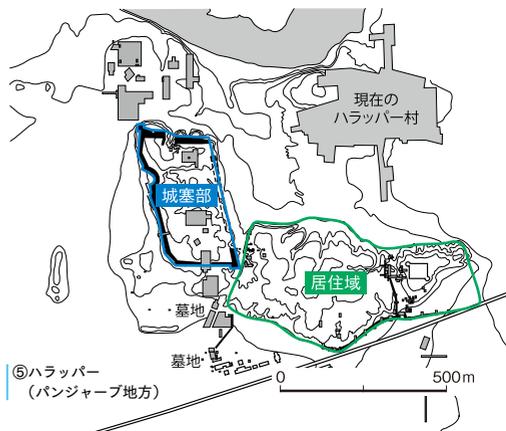


③ロータル（グジャラート地方）

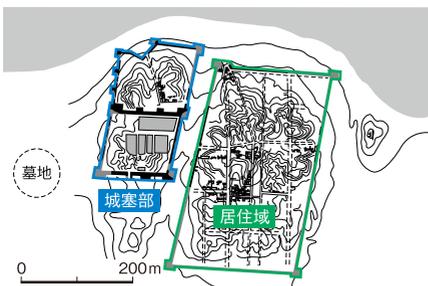
分離型



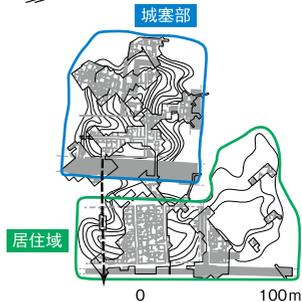
④モヘンジョダロ（シンド地方）



⑤ハラッパー（パンジャブ地方）



⑥カーリーバンガン（ガッガル地方）

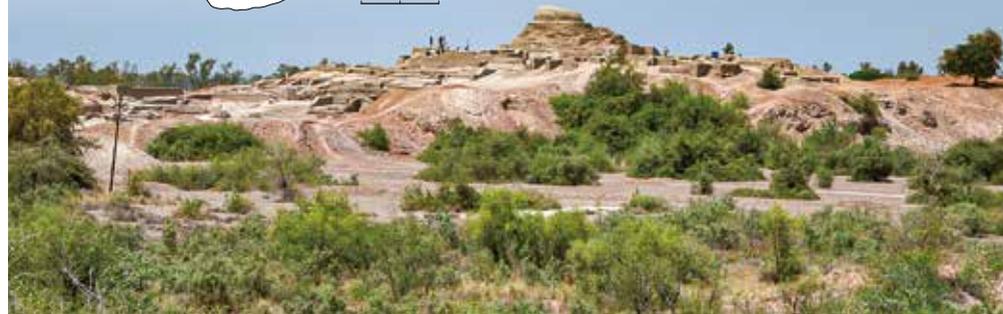


⑦ナウシャロー（パロースターン地方）



モヘンジョダロの城塞部

モヘンジョダロは、「城塞部」と居住域が分かれた分離型の都市である。城塞部は人工の基壇の上に築かれており、居住域にはないさまざまな施設が設けられている。儀礼の場として用いられたであろう沐浴場や、実際の機能は不明ながらも「穀物倉」「僧侶の学院」「集会場」と呼ばれる施設がある。



インダス文明の都市遺跡

都市は、多大な労働力を投じて築かれた地域社会の拠点である。建築用材は地域によって異なっており、焼レンガだけでなく、日干煉瓦や石材も使用された。おそらくは木材も使われていたであろう。



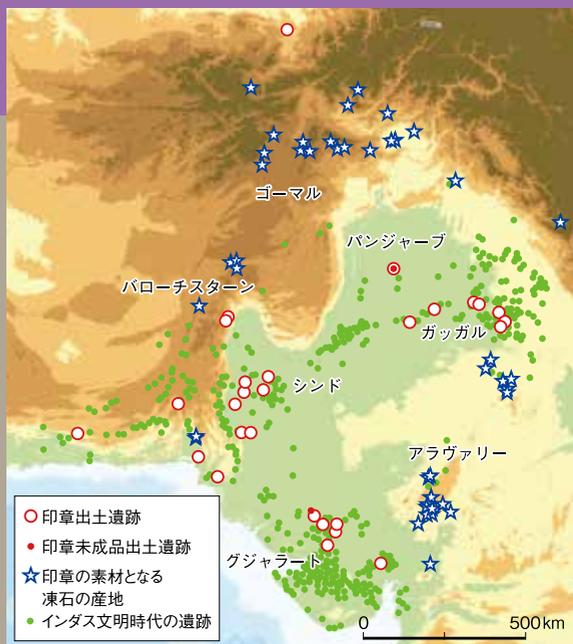
- ⑧モヘンジョダロ遺跡
- ⑨ファルマナー遺跡（ガッガル地方）
- ⑩ドラーヴィーラー遺跡
- ⑪カンメル遺跡（グジャラート地方）

10 インダス文明社会と印章

広域に展開したインダス文明社会には、さまざまなレベルで社会的紐帯が築かれ、人々の生活や社会活動を支えていた。そのなかで、広域レベルでの社会関係のアイデンティティとして機能したのが印章である。

インダス文明時代の印章の分布

動物などが刻まれた凍石製の印章は、北はアフガニスタン北部、南はグジャラート地方、東はガッガル地方、西はパローチスターン地方南部にまで分布する。これはすなわちインダス文明社会の広がりを示している。素材の凍石は平原部周辺の高原地帯に産出する。一方、印章の製作は平原部の複数の都市遺跡でおこなわれており、そこから周辺地域へと流通していたことがわかる。また、デザインに一貫性が認められることから、各地の工房間でデザインに関する取り決めがなされていたのであろう。



印章に刻まれた図柄

日常的に実在した身近な動物だけでなく、想像上の動物も表されている。また、わずかながら人物を刻んだ例もあり、神か王の姿を表したものと考えられる。



印章スタイルの変化

近年の研究で、刻まれた動物の向き、動物の細部の表現、動物に伴って表現される器物の組み合わせに違いがあり、それが時間的な変化を示している可能性が高いことが明らかになりつつある。



古段階
(前2600～前2400年頃)
動物を右向きに表現する。胴部は角ばった断面形に彫られている。

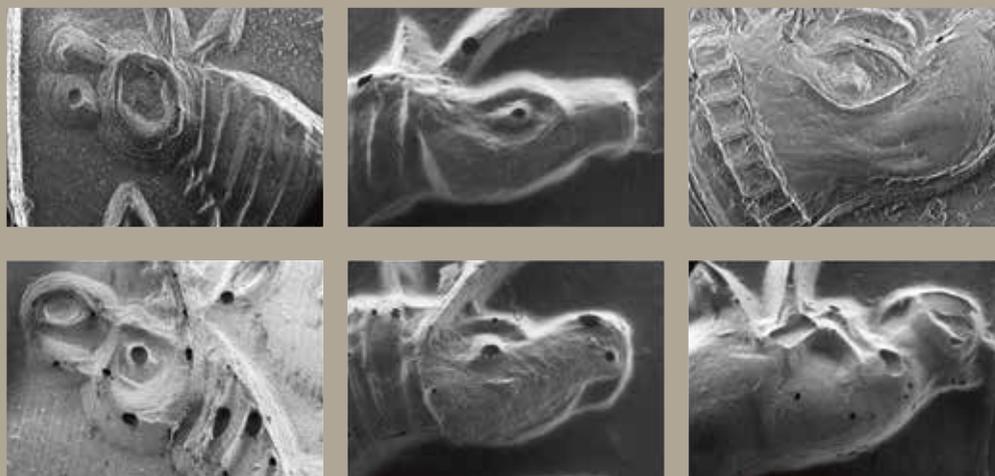
中段階
(前2400～前2200年頃)
動物は左を向くようになり、より写実的な表現となる。

新段階
(前2200～前1900年頃)
動物の彫刻部分は丸みを帯びた仕上げとなっており、より写実性を増す。

印章の彫刻技術

インダス文明の印章は複数種類の彫刻刀を用いて図柄を刻んでいる。古段階の印章は、彫刻技術が稚拙で彫刻面の断面が角ばっているが、次第に彫刻面が丸みをもつようになり、写実性が高くなる。丸みをもたせるために、細かな作業を繰り返しおこなっている様子をみてとることができ、印章製作にあたった職人たちの技術に大幅な向上があったことがわかる。

写真は走査型電子顕微鏡画像



古段階

中段階

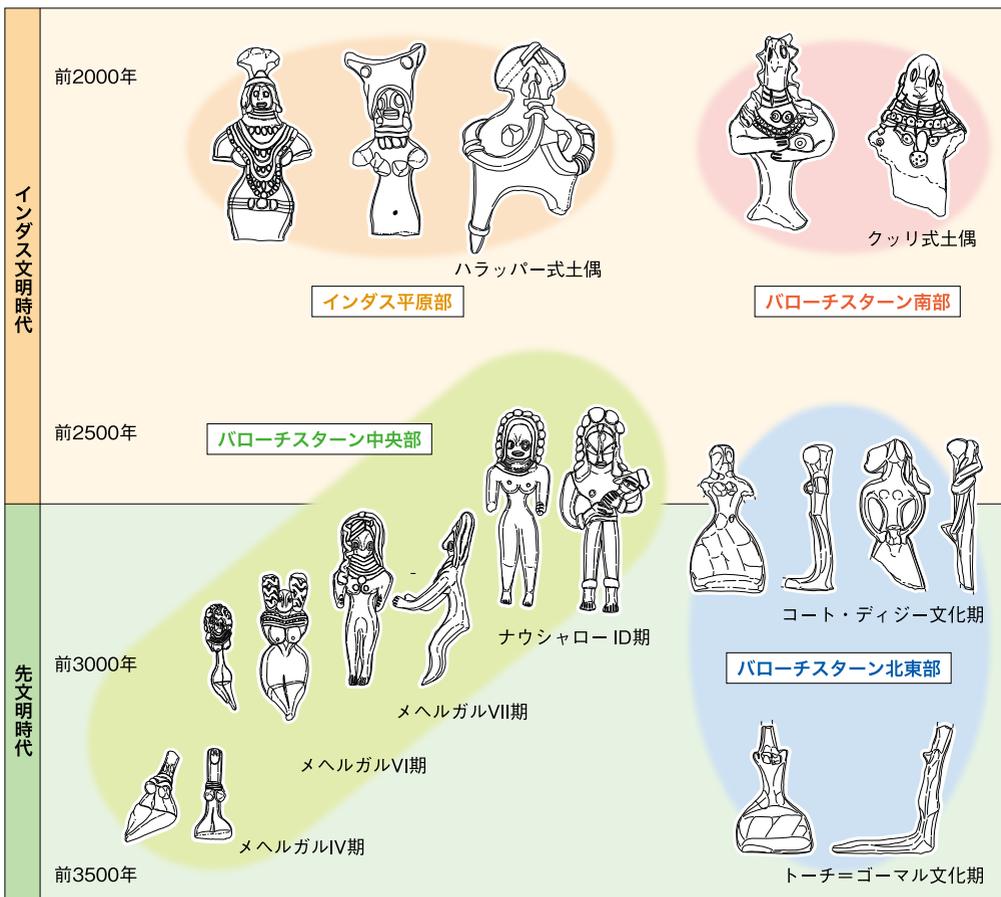
新段階

12 インダス文明の土偶のスタイルと変遷

各地で固有のスタイルをもつ土偶は、地域社会のなかで共有される観念世界を表現したものと考えられる。宗教儀礼や日々の信仰のなかで用いられた可能性が高い。印章と文字を「広域型都市社会全体で共有されるアイデンティティ」とするならば、土偶はインダス文明社会に内包される「地域社会のアイデンティティ」ということができる。

土偶の変遷（先文明時代～インダス文明時代）

土偶というと素朴なイメージが強いが、先文明時代からインダス文明時代にかけてつくられた土偶は、洗練された特徴を持っている。それは誰でもつくれるものではなく、職人が一定のスタイルにしたがってつくったものであることを示す。



バローチスタン地方における先文明時代の土偶

①②はバローチスタン地方北東部、③④は同地方中央部の例である。前者に比して後者はより細部の表現にこだわった造形となっている。黒や黄色の彩色が施されていた。



動物土偶の変遷（先文明時代～インダス文明時代）

動物もまた粘土を用いた造形の対象であった。先文明時代後期にはコブシやヒツジの土偶が出現し、インダス文明時代には、印章と同様、より多様な動物が表現されるようになる。ただし、素朴なコブシ土偶しかつくられない地域もあり、地域によって動物に対するまなざしは異なっていたようである。

